

横浜市立大学のデータサイエンス学部構想

成蹊大学・横浜市立大学 岩崎 学

公立大学法人横浜市立大学は、2018年4月から新しくデータサイエンス(DS)学部を発足させる。この学部は、2017年の滋賀大学に続き日本で2番目、首都圏で初のデータサイエンスの名を冠した学部となる。DS学部はデータサイエンス学科1学科のみを有し、学生定員は1学年あたり60名、教員は、教授・准教授16名を予定している。学位名は学士(データサイエンス)である。横浜市大は現在、国際総合科学部(定員650名/年)、医学部(医学科90名/年、看護学科100名/年)の2学部体制であるが、ここに3番目の学部としてDS学部が加わることになる(ただし、国際総合科学部は2019年4月に3学部体制となる予定である)。

教員は大きく分けて、「統計学・数学・情報」分野に8名、「経済・経営・マーケティング」分野に4名、「医薬・健康科学」分野に4名の配置となる(横浜市大の既存学部から7名、新規採用が9名である)。学生は入学後これらのいずれかの分野を中心に学修することになる。ただし、コース分けなどは行わず、フレキシブルな履修が行えるようにする。これは、ほぼそのまま学生の卒業後の進路となることを期待している。また、できれば大学院を2020年4月から発足させたいと考えている(学部発足後に再検討)。

横浜市大の強みは、医学部があること、および約370万人の人口を擁する国際都市横浜が設立母体であることである。医学部には医療関係のデータが蓄積され、横浜市にも行政データがふんだんにある。また、横浜近辺に拠点を置く企業も数多く、ここもデータの宝庫であるといっても過言ではない。すなわち、実際のデータに不自由しないというのは大きなメリットである。現在、DS学部の学生のインターン先、および共同研究などの協力提携先を模索中であるが、そのリソースは多く楽観気味である。

目まぐるしく変化する現代であるからこそ、変化しない普遍的な価値を持つ基礎はしっかり教育するが、変化に富み刺激的な現状をも学生に伝える仕組みを構築する。実際の教育カリキュラムは、DS学部設立準備組織であるデータサイエンス推進センター(センター長:岩崎)で細部を詰めている最中であるが、予習・演習・復習を主体とした授業とする。教室での座学の部分をなるべく減らし、各授業に演習の時間を設け、頭に加えて手を動かす授業としたい。アクティブラーニング、反転授業などといった言葉が独り歩きしている感はあるが、それらに惑わされず、実質的な授業展開を考えている。そのためには、各教員が授業の準備と後始末に十分時間を費やすことができるように、余分な書類書きや研修を極力減らしたいと考えている。

データサイエンスの名を冠する、学部はともかくプログラムやコースの設立在り予定されていると聞く。それらの良きお手本となるような学部としたい。